

4月29日の礼拝メモ

『人生、やり直しがきく』

ルカの福音書 13:6~9

ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。

序]

本来、我らは愛されて当然ではなく、滅ぼされて当然であったのに、神のあわれみの故に赦され、神に愛されている。しかし、それは主の仲立ちがあるからである。この恵みの真理をたとえから学ぶ。

本]

I たとえの意味

- ①「ある人」=ぶどう園の主人(6)
- ②「いちじくの木」=直接的にはイスラエル人。

とすると「ぶどう園」は世界。

*聖書では、神を信じる我らのことを「霊的イスラエル」と呼ぶ。ゆえに「いちじくの木」は我ら自身のことでもある。主人は期待して足を運んできたのに、三年間、実を一つも見られなかった。主人は切り倒すように言う。我らは神の期待を裏切っていないか？そもそも神の期待を考える以上に、自分の期待に神がどれほど応えて下さるかしか考えていないのではないか？自分が神の役に立っているかを考えるよりも、神が自分の役に立っているかということしか考えていないのではないか？この自己中心を罪という。自分の立場を弁えない傲慢な我らは神の忍耐をもっと考えよう。

- ③「実」とは悔い改めの実(1~5)。

たとえ話のきっかけとなった1~5節の話からわかることは、主イエスは因果応報を否定されて「悔い改めなければ同じようになる。」と強調された。あたかも自分はそれほどの罪人ではないと思いがっていたイスラエル人。我らにしても、心底悔い改めたことがないという罪を持っていないか？神が求めておられる結実とは、真実に悔い改めることである。

II たとえ話の真の強調点

*たとえに登場する最後の人物は「ぶどう園の番人」。彼は、「いちじくの木」が切り倒されることを主人に待って下さるように懇願した。彼は、あたかもいちじくの木的身代わりになるかのように、自分に免じて勘弁してやって下さいと主人に取り付けた。彼は、父なる神に執り成すイエスである。ルカは十字架にかかれる主を記し、十字架上で執り成すイエスの言葉を記した。「そのままにしてやってください」とは「父よ。彼らを赦してください」である。

結]

主は、結実の無い我らのために身を捧げて下さった。イスラエル人の悔い改めない罪がキリストを十字架に追いこんだ。今日、我らはキリストの愛に応え、悔い改めて、実を結ぼう。人生、やり直しがきく。